

かささぎ通信 第138号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2024年 7月 12日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2024年6月の「森三郎の作品を読む会」では、
「針」(『赤い鳥』1933年8月号)と「灯」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)を読みました。

『赤い鳥』1933年8月号掲載の「針」は、四年生になってお裁縫が学科として始まったばかりの葉子や松江たちの生活を描いています。主人公が女子の童話の場合は、三郎さんは筆名も女性にしています。今回は「利根川たみ」の名前で書かれています。

作品の時代は昭和8年以前のことですから、裁縫の授業は女子のみの履修でした。男子は四時間で帰り、裁縫は午後の五時間目に行われます。それぞれの家庭で新しい裁縫箱を揃えてもらった女子児童たちが、互いに裁縫箱や道具などを見せ合っている様子にぎやかにしている様子が描かれています。先生に裁縫の初歩から教わり、「一、二、三、四、五、六、七、と、口の中でかんじようをしながら七針縫ふと、ざらッと、しごき／＼して縫ひ出しました」と並み縫いの描写など面白いぶん詳しいのは、家で和裁を教えていた母親の様子を三郎さんは幼いころから目にしていたからでしょう。

教室のあちこちで明るい声が弾む中で、葉子と同じ机に並ぶ松江は裁縫箱を隠すようにしています。松江の裁縫箱は姉の使ったもので、他の子のものより大きな黒塗りのものでした。葉子の赤い漆塗りの物とは違うのです。裁縫の時間が終わる時に針の数を確認しますが、葉子の針が一本足りません。松江に聞いても知らないというばかりか、先生に言いつけ、葉子は罰当番でお掃除をすることになります。

ところが葉子が家に帰ると松江が待っていて、自分の運針用のさらし布に葉子の針が刺さっていたことに気づいたと詫び、次の当番の時には自分が代わりにするからとやさしく告げます。松江はお母さんと新しい裁縫箱を買いに行くと言ってうれしそうにかけて行きました。

ハサミや針山などの必要な道具を新しくすれば、裁縫箱は家にあるものでいいという松江のお母さんの合理主義は子どもには通じなかつたというわけです。帰宅した松江からきつと「みんな新しい裁縫箱だった・・・」「古い裁縫箱の子は私ひとりだけだった」というような話を聞かされ、お母さんが折れたのでしょうか。教室では虚勢を張っていた松江の心の内がよく分かります。題材を変えれば現代の子どもたちの間にも起こり得る話でしょう。

たというわけです。帰宅した松江からきつと「みんな新しい裁縫箱だった・・・」「古い裁縫箱の子は私ひとりだけだった」というような話を聞かされ、お母さんが折れたのでしょうか。教室では虚勢を張っていた松江の心の内がよく分かります。題材を変えれば現代の子どもたちの間にも起こり得る話でしょう。

『雪こんこんお寺の柿の木』所収の「灯」は、浜の娘の渚が毎夜水神様の丸灯籠に灯をつけて、三年前に漁に出て行ったきりもどらない許嫁の定丸を待つ話です。タイトルの「灯」は丸灯籠の灯を目当てに漕ぎ寄せる定丸の船の光であり、定丸その人の目の光であるはずでした。ところが定丸の乗った船は遭難し、琉球へ漂着したこと、そこで商売を始め、持っていた薬で島の女王の病気を治し、宮廷で重く用いられるようになったことが分かります。それから四年目、琉球を討伐した船から俘虜たちが陸へ上がると、その中にいまや琉球の女を妻にした定丸もいたのです。薩摩屋敷に収容された琉球の俘虜たちは、都に移された後、琉球に返されますが、定丸は世を捨て定西という坊さんになったという噂が届きます。七年の間定丸を待って灯籠に灯をともし続けた渚は、この先どう生きるかわからないまま、何かを待ち続けるつもりでした。その時、沖合に浮かんだ船から下りた老人が「お前が待っていたのはわしかもしれない。わしの名は永遠というのだ」と言つて、渚の手を取り闇の中に消えていきました。

定西には「定西琉球物語」「定西法師伝」という話があり、兄の森銃三が紹介しています(初出昭和八年、『古書新説』所収「昭和十九年」)。定西の前半生は幸運に恵まれ華やかでしたが、後半は暗い現実の中で一心に弥陀を念じました。三郎さんはその裏に彼を信じ待ち続け栄華とは無縁に生きた女性を想定してこの作品を書いたのでしょうか。

〈次回予定〉2024年9月13日(金)午後一時半〜三時半

「父」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)

「副級長」(『赤い鳥』1933.9) 8月は休会です。